

「モチベーションを高める指導」

代々木ゼミナール教育総合研究所
コンサルタント 吉田 敦

私が昔、ある病院の理学療法士の方に聞いたお話を紹介します。

— どれだけ患者さんに残存機能があっても、リハビリへのやる気がない場合にはなかなか日常生活動作の改善は難しい。だから、理学療法士の仕事のひとつとして、患者さんのリハビリへのやる気を起こさせることがある。 —

大まかに以上のような内容だったと思います。理学療法士として身につける基本的な技術の習得は当然必要ですが、患者さんに「やる気」を出してもらうことの大切さについてうかがいました。

これを学校現場に置き換えて考えてみると、先生方が生徒に対して教科の専門知識を伝えることはもちろん重要ですが、それと同時に、生徒にやる気を起こさせることも非常に重要なのではないかということかと思えます。本稿では、やる気・モチベーションにテーマを絞り、学校現場においてどのように生徒に働きかけることが有効かについて、考えていきたいと思えます。

<目次>

はじめに

じっとさせないこと

- 問題を与える、試験を行う
- グループワーク（発表、発言）
- 問題を作らせる
- 発問により考えさせる
- 宿題・課題を出し考えさせる

達成感を与えること

- 小さな目標を一つ一つクリアさせる
- その日できたところまでを書き留めさせる
- 率直で誠実な評価を与える（褒める、認める）
- 期待をかける、伝える
- 100%教えない

さいごに

■はじめに

生徒の学習へのモチベーション・やる気を高めるためにはどんなことが必要でしょうか。また、先生方は生徒のやる気向上のためにどんなことに力を入れて指導をされていますでしょうか。

生徒の学習へのモチベーション・やる気を高めるためには、二つの重要な点があると考えます。一つは生徒を「じっとさせない」こと、もう一つは生徒に「ご褒美を与える」ことです。この二本の柱、「じっとさせない」と「ご褒美を与える」について、以下では細かく述べてまいります。

ご担当の教科によっては、実態とそぐわない部分があるかもしれませんが、参考になりそうな点をご指導の中に取り入れていただければ幸いです。

■じっとさせないこと

「じっとさせない」とは、生徒が寝たり、スマートフォンをいじったり、おしゃべりをしたり、授業中に別のことをする時間を与えないようにするということです。

一見「やる気、モチベーション」とは関係ないように感じられるかもしれませんが、じっとさせないことにより、やる気により影響があります。生徒のモチベーション低下は、授業中に生徒が「じっとしてしまう」ことで起きやすくなってしまうため、そうさせない工夫を行うことが有効と考えます。生徒は、やる気があって勉強するのではなく、机の前に座って勉強を始めることで、次第にやる気を持っていくという考え方に基づいています。このように、まず授業中は、いかに生徒をじっとさせないかについて考えていくことが肝要と考えます。

では具体的に、生徒をじっとさせない方法とはどのようなものでしょうか。以下は、生徒をじっとさせない具体的な方法と、その方法を行った際の生徒の好ましくない反応、およびそれに対する対応方法の一例をまとめたものです。順に細かく述べていきます。

じっとさせない方法	考えられる生徒の反応	対応方法
問題を与える、試験を行う	マンネリ化して、取り組まない	事前に明確な指標を与えてから取り組ませる
	分からない、できないため取り組めない	初回授業で教科学習の意義を伝える。生徒の身近なものに関連させた例示。
グループワーク（発表、発言）	発言者が偏る	個人ワーク後に行う。
	誰も発言しない	テーマや時間を明確に決めて行う。
問題を作らせる	全くできない	生徒に合わせた段階的対応
発問により考えさせる	黙り込んでしまう	クローズド・クエスチョン、択一方式
	全くかけ離れた答えをしてしまう	前提理解確認後、質問観点を絞って、既知既出項目の中から発問
宿題・課題を出し考えさせる	取り組まない	外的アプローチ、内的アプローチ

■じっとさせない方法

一 問題を与える、試験を行う

じっとさせない方法	考えられる生徒の反応	対応方法
問題を与える、試験を行う	マンネリ化して、取り組まない	事前に明確な指標を与えてから取り組ませる
	分からない、できないため取り組めない	初回授業で教科学習の意義を伝える。生徒の身近なものに関連させた例示。

生徒を授業中じっとさせない方法としては、問題演習を行わせたり、試験を行ったりすることが挙げられます。ただし、初回実施時は集中しても、マンネリ化した問題演習やテストでは次第に効果が薄れてしまうかと思えます。こうした際には、事前に明確な指標を与えて問題演習やテストを行うことが有効です。

例えば、「この問題は昨年の早稲田大学の入試問題です。7問中5問が合格ラインです。特に(4)が合否を分けるポイントです。それでは、解いてください。」と言えば、何も言わずに解かせる場合よりも、生徒の取り組み姿勢は向上すると考えられます。これを家庭学習での宿題に応用するならば、「今日の宿題のうち本番の試験で合否を分けるのは問2, 4, 6です。問1, 3, 5は当然できていなくてはなりません。落とし穴があるのでそれに落ちないように気をつけて。」などと言うだけで、生徒には「やってみよう」という気持ちが生まれるのではないのでしょうか。

ただし、こうした問題を与えることや、試験を行わせる際、生徒が学習内容を理解できていない場合には、全く取り組めないというケースも考えられます。授業中の説明などにより、内容を分かりやすく伝えることはもちろんですが、その教科を学ぶことが生徒の将来にどのような意味をもつのかについては、生徒の意識をその教科に向けさせるためにも強調しておく必要があります。特に、初回授業においてこの点を伝えることは、やる気という面で効果的です。

■じっとさせない方法

ー グループワーク（発表、発言）

じっとさせない方法	考えられる生徒の反応	対応方法
問題を与える、試験を行う	マンネリ化して、取り組まない	事前に明確な指標を与えてから取り組ませる
	分からない、できないため取り組めない	初回授業で教科学習の意義を伝える。生徒の身近なものに関連させた例示。
グループワーク（発表、発言）	発言者が偏る	個人ワーク後に行う。
	誰も発言しない	テーマや時間を明確に決めて行う。

生徒を授業中じっとさせないための方法として、グループで考えさせ、発表させる、発言させる、などは様々な場面で導入されているかと思います。ただし、ここでも発言者が偏ることや、誰も発言しないまま時間だけが過ぎてしまうことなど、好ましくない反応が見られることもあるかと思います。

こうした場面に対しては、予めそのテーマについて個人の意見を紙に書かせてからグループに持ち寄ることが有効です。「個人ワーク⇒ペアワーク・グループワーク」という流れで行うことで、いきなりグループワークを行うよりも皆が発言しやすくなります。

また、あっという間に話し合いが終わってしまい、黙りこんでしまうグループや、関係のない雑談をしてしまうグループなどが出てしまうこともあります。これに対しては、事前にテーマや時間を明確に決めて行うことが有効でしょう。例えば、個人ワーク後に「グループ内で黒板の□部分を埋めなさい」という課題を出したり、「○○について3分間で話し合いなさい」などと指示を与えて時間を計ることで、改善するケースが出てくるかもしれません。

詳細については先生方が様々な工夫をされているかと思いますが、本稿ではグループワークにより生徒をじっとさせないことが、やる気を引き出すことに繋がるという指摘にとどめます。

■じっとさせない方法

一 問題を作らせる

じっとさせない方法	考えられる生徒の反応	対応方法
問題を与える、試験を行う	マンネリ化して、取り組まない	事前に明確な指標を与えてから取り組ませる
	分からない、できないため取り組めない	初回授業で教科学習の意義を伝える。生徒の身近なものに関連させた例示。
グループワーク（発表、発言）	発言者が偏る	個人ワーク後に行う。
	誰も発言しない	テーマや時間を明確に決めて行う。
問題を作らせる	全くできない	生徒に合わせた段階的対応

生徒を授業中じっとさせないために、問題を作らせるという方法があります。「問題を解く」のとは逆の活動を行うことですが、生徒が新鮮に感じることや、作問の仕組みや作問者の意図を理解する手助けとなるなどのメリットが考えられます。

ただし、あまり慣れない活動であるため、生徒が全く何もできずに時間だけが過ぎてしまうことも考えられます。全くのゼロからの作問が難しい場合には、生徒の状況に応じて以下のA～Dなどの手助けを行うことで、同様の効果が期待できると考えます。

- A.見本を提示して、対象分野や作問形式のアドバイスを行う
- B.過去に生徒に作成してもらった問題をストックしておき使用する
- C.作問が難しければ解説のみさせる
- D.問題をつくる過程を見せる授業を行う

上記A～Dどれくらいの手助けを行うかはクラスや状況によっても異なるかと思いますが、普段行う「問題を解く」のとは逆の活動を行うことで、ある程度学習が進んだ生徒に対しては、有効に働く場面もあると考えられます。

■じっとさせない方法

一 発問により考えさせる

じっとさせない方法	考えられる生徒の反応	対応方法
問題を与える、試験を行う	マンネリ化して、取り組まない	事前に明確な指標を与えてから取り組ませる
	分からない、できないため取り組めない	初回授業で教科学習の意義を伝える。生徒の身近なものに関連させた例示。
グループワーク（発表、発言）	発言者が偏る	個人ワーク後に行う。
	誰も発言しない	テーマや時間を明確に決めて行う。
問題を作らせる	全くできない	生徒に合わせた段階的対応
発問により考えさせる	黙り込んでしまう	クローズド・クエスチョン、択一方式
	全くかけ離れた答えをしてしまう	前提理解確認後、質問観点を絞って、既知既出項目の中から発問

ここまでは、主に生徒を授業中じっとさせないための活動を挙げてまいりました。一方で、こうした活動を行わなくても、発問によって生徒に考えさせることで、生徒の頭の中を「じっとさせない」方法があり、講義形式の授業中に有効と考えられます。

ただし、発問を行っても生徒の中には黙り込んでしまったり、全くかけ離れた回答をするケースもあるでしょう。黙り込んでしまう生徒には、「君はどう思う？」「なぜそう思うの？」などのオープン・クエスチョンではなく、「Yes/No」で答えられる質問や3択から答えを選ばせるような、クローズド・クエスチョンの発問を行うことにより、答えやすくなります。

また集団授業においては、生徒がクラスの他の生徒の前で間違ふことに対する心理的な負担を軽減する工夫も考えていく必要があるかもしれません。一例としては、指名の際に答えが合っている、間違っているも複数人指名することで生徒の回答への心理的負担を軽減する方法があります。また、発言した生徒に対しては、発言内容を生かすようなフィードバックを行い、クラス全体の理解に自らの発言が一役買ったことを認識させることは有効です。

生徒が予想に反して全くかけ離れた答えをしてしまうこともあるかと思えます。限られた

授業時間ですから、事前にこうしたケースを防ぐために、「前提理解の確認後に、質問観点を絞って、既知・既出項目の中から発問する」ことが有効です。

例えば、「先週行った反実仮想とは〇〇というものでした（前提理解の確認）。では、次のうち（質問観点を絞って）、反実仮想が使われている文章はどれでしょう（既知・既出項目の中から発問）」などの発問方法により、全くかけ離れた答えをすることが防げると考えます。

別のケースとして考えられるのは、先生方が重要箇所を発問した際に、生徒によって「もうわかっている」という態度を示すような場面です。こうした生徒に対しては、「実は理解できていない」ということを気づかせる発問で刺激を与えることが有効かもしれません。これにより、基礎内容をしっかり身につける大切さを伝える効果があります。自分が気付かなかった点への発問に刺激を受けた生徒は、その後の授業への集中度も高まっていくと思われれます。こうした発問をするためにも、生徒が躓きやすいポイントについては、いくつか発問を用意しておき、教室の状況に合わせて使用していくことが有効と考えます。指導時にも無理な暗記を強要せず、厳選した情報の提供を心掛けること（分からなくなったら戻るべき必要最低限の内容を与えること）や、論理的な説明を心がけることが効果的なようです。

■じっとさせない方法

一 宿題・課題を出し考えさせる

じっとさせない方法	考えられる生徒の反応	対応方法
問題を与える、試験を行う	マンネリ化して、取り組まない	事前に明確な指標を与えてから取り組ませる
	分からない、できないため取り組めない	初回授業で教科学習の意義を伝える。生徒の身近なものに関連させた例示。
グループワーク（発表、発言）	発言者が偏る	個人ワーク後に行う。
	誰も発言しない	テーマや時間を明確に決めて行う。
問題を作らせる	全くできない	生徒に合わせた段階的対応
発問により考えさせる	黙り込んでしまう	クローズド・クエスション、択一方式
	全くかけ離れた答えをしてしまう	前提理解確認後、質問観点を絞って、既知既出項目の中から発問
宿題・課題を出し考えさせる	取り組まない	外的アプローチ、内的アプローチ

生徒を「じっとさせない」方法には、授業中の発問以外にも家庭学習用の宿題・課題を出して考えさせる方法があります。この場合、取り組まない生徒への対応が必要になってまいります。生徒に取り組ませる方法としては、外的アプローチ、内的アプローチの二種類が考えられます。外的アプローチとしては、やらないと成績評価に悪影響がある状況や、次の授業についていけなくなってしまう状況を作り出すことです。この場合には、生徒の課題提出状況をチェックしたり、宿題・課題の内容をもとに次の授業を行う必要が出てきます。

内的アプローチとしては、宿題や課題を行うことが生徒のやる気につながる状況を作り出すことです。生徒に達成感を与えるよう「褒める」ことなど、フィードバックを与えることがやる気につながると考えられます。

これら外的アプローチと内的アプローチの両面をうまく使い分けながら、生徒を宿題、課題へと向かわせ、「じっとさせない」ことが有効と考えます。特に、内的アプローチを工夫することが、モチベーション向上には大きな役割を担うと考えます。

■ご褒美を与えること

ここまでは、生徒にやる気を起こさせるために、生徒をじっとさせないための教室内外での方法や、注意点をまとめてきました。ここからは、生徒のモチベーションを高めるためのもう一つの柱である「ご褒美を与える」ことについて考えていきます。

生徒のやる気、モチベーションを高めるためのご褒美とは、「達成感」のことです。生徒にいかにか達成感を与えるかが、やる気向上のためには重要です。この達成感とは、生徒が「現状」と「ゴール」の差を乗り越えたときに生まれると考えられます。当然、この差が大きければ大きいほど、達成感も大きくなります。前掲の「内的アプローチ」と共通しますが、実際の方法を以下にまとめ、行う際の教員側の留意点も記載しています。生徒の視線や歩幅を理解した上での指導が必要になる点はいずれにも共通しています。

達成感を与える方法	教員側の留意点
小さな目標を一つ一つクリアさせる	与える教材の順番（連続性と段階性）
その日できたところまでを書き留めさせる	定量的、定性的の両面から記載
率直で誠実な評価を与える（褒める、認める）	生徒の認識に合わせて、成長部分を具体的に評価
期待をかける、伝える	ロールモデルの提示などにより、なりきらせる効果に期待
100%教えない	知的好奇心をそそる

■達成感を与える方法

- ー 小さな目標を一つ一つクリアさせる

達成感を与える方法	教員側の留意点
小さな目標を一つ一つクリアさせる	与える教材の順番（連続性と段階性）

この方法は、苦手意識の高い生徒やその内容を初めて学習する生徒に対して有効な方法です。スモールステップにより、「今日はこれができた」ということを一つ一つ実感させていくことで、階段を一段一段上るように、生徒は自分自身の成長を感じることができると考えます。いきなり大きな目標を与えてしまうと、生徒は負担に感じてしまい、挫折しやすくなってしまいうため、最終目標の達成に向けて、小さなステップを一つずつクリアさせていく方法を考えることがモチベーションを保ち、最終的な目標達成にも期待が持てると考えます。

この際、教員側の留意点としては、スモールステップで与える教材・課題に連続性と段階性を与えることです。最終目標を明確に見据えて、そこに向けて、連続的かつ段階的な指導計画を作ることが有効です。連続性については、前に習ったことを生かして次の新たな問題を解決していくような、核になる本質的な部分を中心に指導計画を立てることで達成できると思われます。

一例として、社会人向けのピアノの教科書にこの連続性と段階性の考え方に類似する点がありましたので、ご紹介いたします。大人の初心者に向けて書かれたピアノの書籍で、目標は「一人で楽しくピアノが弾けるようになること」です。章ごとに分かれた大まかな構成は以下の通りです。

- ①右手でなじみのあるメロディーをひく（易しいものから順に難しくなり、どこかで聞いたことがある簡単なメロディーを右手で引けるようにする）。
- ②左手の練習（①で行った右手の簡単なメロディーに合わせて一部左手でソだけを弾く。）
- ③左手の練習<応用>（右手のメロディーを①で行ったもののうち、少しずつ難しくしていき、左手もソだけでなく、ドミソなどバリエーションを増やしていく。）
- ④両手の練習（すでに学習した右手のメロディーに合わせて左手でドミソ、レファラなどのコードを弾く）

ここには、①で学んだ右手の内容からの、連続性と段階性が見られます。仮に、①で学んだ右手のメロディーがその後一度も出てこなければ、それぞれはつながりのない（連続性のない）ものになってしまいます。また、いくら目標が両手でピアノを弾くことであっても、いきなり両手奏からスタートしたのではステップが大きすぎる（段階性のない）ものといえます。

■達成感を与える方法

- 一 その日できたところまでを書き留めさせる

達成感を与える方法	教員側の留意点
小さな目標を一つ一つクリアさせる	与える教材の順番（連続性と段階性）
その日できたところまでを書き留めさせる	定量的、定性的の両面から記載

モチベーションを高めるために、生徒に達成感を与える方法として、その日できたところまでを書き留めさせる方法があります。書き留めて視覚化することで、生徒もはっきりと認識ができ、客観的に自ら行ったことを捉えることができるようになります。進捗具合の確認ができるため、達成感につながると考えられます。先生方が授業中に説明される際にも、絵や図を用いたり ICT 機器を活用することで様々な「視覚化」を実践されているかと思いますが、生徒が自分自身の達成状況を書き留めることでも「視覚化」は可能となり、有効に働きます。

また、書くことはアウトプットをする行為であり、生徒自身の心の整理につながる効果も大きいと考えられます。この意味でも、最終目標とそれに向かっの、その日できたこと、成長できたことをノート等へ書き留めていき、適宜見返していくことは達成感を得る点で有効です。

部活動などで、練習ノートを生徒につけさせている先生方もいらっしゃるかと思いますが、これにも似た考え方です。ノートを見返して、「問題点や改善点を自ら振り返り、考え・気づく」ことにより、成長に向けて大きな効果が期待できます。

ただし生徒の中には、どのように記載したらよいか分からないという場合もあるかと思いますが、数字で表せるものはなるべく数字で表しておくこと（定量的な状況把握）と、個人の感じたことを簡潔に記載すること（定性的な状況把握）の両面から記載することで、振り返りの際に有効と考えられます。これらを継続して行っていくことで、達成感を得るためにも、目標を実現するためにも有効に働くと考えます。

■達成感を与える方法

- 一 率直で誠実な評価を与える（褒める、認める）

達成感を与える方法	教員側の留意点
小さな目標を一つ一つクリアさせる	与える教材の順番（連続性と段階性）
その日できたところまでを書き留めさせる	定量的、定性的の両面から記載
率直で誠実な評価を与える（褒める、認める）	生徒の認識に合わせて、成長部分を具体的に評価

生徒に達成感を与えモチベーションを高める方法として、褒めることがあります。生徒は褒められ、認められることで、自らが行ったことが正しいものであると認識できるようになりますので、褒めることはモチベーションを高める効果があります。

生徒個人を褒めるタイミングや方法としては、生徒の発言後、回収物やテストの返却時、授業と関係のない時間など様々あります。声をかける方法以外にも、返却するノートやテストにコメントを記入する方法や、クラス全体に匿名で優秀作品を紹介する方法などもあります。個人だけでなく集団を褒める方法としては「君たちは優秀だから…」などと全体に話す方法があり、これはクラス全体のモチベーションを高める効果があると考えます。

ただし、褒め方には注意点もあります。全体の位置や平均値から評価して褒めた場合には、逆に生徒の負担になってしまう場合や、過小評価されていると感じて不満につながってしまうことが考えられます。

例えば、サッカーの試合をして生徒自身がその日の自分のパフォーマンスを「70点」と認識している場合に、先生が「100点」の褒め方をしてしまうとどうでしょうか。生徒はこの程度のプレーでこんなに褒められるのかと、過剰に評価されたと感じてしまうでしょう。一方で生徒自身は「70点」と認識しているにも関わらず「40点」の褒め方しかしてもらえない場合には、どこがいけなかったのだろうと、過小に評価されたことに不安を感じてしまうと考えられます。ここで大切なのは、生徒の自己評価にあった褒め方をすることです。

このため、生徒自身がその状況をどう捉えているのかを察知した上で、前回からの成長部分を具体的に評価することが褒める際には有効であると考えられます。

■達成感を与える方法

一 期待をかける、伝える

達成感を与える方法	教員側の留意点
小さな目標を一つ一つクリアさせる	与える教材の順番（連続性と段階性）
その日できたところまでを書き留めさせる	定量的、定性的の両面から記載
率直で誠実な評価を与える（褒める、認める）	生徒の認識に合わせて、成長部分を具体的に評価
期待をかける、伝える	ロールモデルの提示などにより、なりきらせる効果に期待

生徒に達成感を与えモチベーションを高める方法として、期待をかける、伝えるという方法があります。生徒は期待をかけられることで、未来の自分がイメージできるようになります。これはモチベーションの維持・向上に効果的です。「君ならできる」と期待をかけられることは、それまでの自身の努力や達成度合いを振り返ることに繋がるため、自己肯定感を得る機会にもなるでしょう。

成績がなかなか伸びずに悩んでいる生徒にも、「昨年〇〇大学に入学した先輩は、今のこの時期になかなか成績が伸びなかったけれど、あきらめずに努力して合格できたよ」などと身近な先輩の成功例を提示してイメージを抱かせるようにすることは効果的です。

既に進学・就職している先輩からのメッセージなどを、通信類やホームページなどに掲載して紹介することや、生徒の前でこうした先輩たちに講演をしてもらうことで、生徒に未来の自分をイメージさせることも良い機会になると考えます。

期待をかけて、それを伝えることは、生徒に未来の自分の姿を想像させ、大学生になった自分、活躍している自分に「なりきらせる」効果があるため、モチベーションの意味でも大きいと考えます。

■達成感を与える方法

ー 100%教えない

達成感を与える方法	教員側の留意点
小さな目標を一つ一つクリアさせる	与える教材の順番（連続性と段階性）
その日できたところまでを書き留めさせる	定量的、定性的の両面から記載
率直で誠実な評価を与える（褒める、認める）	生徒の認識に合わせて、成長部分を具体的に評価
期待をかける、伝える	ロールモデルの提示などにより、なりきらせる効果に期待
100%教えない	知的好奇心をそそる方法

生徒に達成感を与えモチベーションを高める方法として、100%教えずに知的好奇心をそそる方法があります。先生が生徒に全てを説明してしまうと、生徒はそれを受け取るだけになってしまい、自分で考える機会が少なくなるケースがあります。一方、発問をした際に、すぐに答えを伝えないことで、知的好奇心が高まり、モチベーションの向上に期待が持てることがあります。

例えば、以下のような説明の方法が考えられます。

「これには2つの理由があります。1つは〇〇です。もう1つは何でしょう。次の授業までに考えてください」

「このやり方で大部分の問題は解けます。しかし、この問題ではここまでしか解けません。では、どうすればよいでしょう。次の授業で答えを説明します」

「今日の授業では〇〇を扱いましたが、〇〇と△△の違いは何でしょう。（似た2つの言葉など）答えは次の授業で説明します」

これらの方法は、生徒の知的好奇心を高めるために効果的です。授業の中で、生徒の「知りたい」という気持ちを刺激することにより、モチベーション維持・向上のために良い効果が期待できます。

■さいごに

ここまでに記載した様々な方法を活用することによって、生徒に刺激を与えることがやる気、モチベーションのために有効であると考えます。ただし、刺激を与える際には、適切なタイミングで刺激を与え続けることが肝要です。やる気自体は刺激がなくなることにより、一般的には下がってしまうため、こまめな刺激を定期的に与え続けることが、やる気の維持・向上には有効です。

これまで述べたやる気を起こさせる様々な手法を、指導の中のに配置いただき、生徒のやる気が向上する一助となれば幸いです。

(おわり)

参考文献

上大岡トメ、池谷裕二「のうだまーやる気のコツ」(幻冬舎) 2008